

氏名	片岡 義裕			
学位の種類	博士（医学）			
学位記番号	博甲第 8260 号			
学位授与年月	平成 29年 3月 24日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	地域枠で入学した医学生の医師不足地域に定着する 意思とその関連する要因			
主査	筑波大学教授	博士（医学）	梶 正幸	
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	鈴木 英雄	
副査	筑波大学助教	博士（医学）	大井 雄一	
副査	筑波大学助教	博士（生物科学）	上野 悟	

## 論文の内容の要旨

片岡義裕氏の博士学位論文は、地域枠制度で入学した医学生が卒業後に医師不足地域に定着する意志と関連する要因をアンケート調査により検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、全国の地域枠学生を対象としたアンケート調査を実施し、以下の3つの研究を行った。

### [研究1]

まず、著者は、2010年度の時点で地域枠制度を導入していた63大学の内、医学部長の同意が得られた大学において、地域枠制度で入学した1年生全員を対象として、自記式質問紙を用いて横断調査を実施した。質問紙では、説明変数として、性別、年齢、出身地などの基本情報に加え、将来の進路選択に影響する因子や卒業後の進路希望、地域枠学生であることに因るストレスや励み、地域枠を選択した主な理由を質問した。また、従属変数として卒業後に医師不足地域に定着する意志（以後、「定着意思」と略する）について質問した。

38大学の405名から回答を得た（回答率74.7%）。定着意思が高い学生は212名（52.3%）だった。多変量解析で定着意思が高いことと関連していたのは、町村部・へき地出身であること（オッズ比（OR）1.8）、地域枠学生であることを励みに感じる事（OR 3.6）、地域枠を選んだ理由が医師不足地域に貢献したいことであったこと（OR 4.2）、地域枠選択において奨学金を受給できることの影響が大きかったこと（OR 1.7）であった。

### [研究2]

次に著者は、研究1の対象者が6年生になった2015年に、全国の地域枠学生全員を対象として、横断調査を実施した。質問紙の内容は研究1とほぼ同じであるが、ロールモデルの有無、初期臨床研修の希望病院を選ぶ上で地域枠学生であることが影響したかどうか、奨学金を返還し地域枠制度から離脱する可能性、医師不足地域での就労に対する不安などの質問を追加した。

38 大学の 346 名から回答を得た（回答率 64.8%）。定着意思の高い学生は 74 名（21.4%）だった。多変量解析で定着意思が高いことと関連していたのは、地域枠をストレスと感じないこと（OR 0.5）、地域枠を励みと感じること（OR 4.5）、ロールモデルが存在すること（OR 2.4）、総合診療科を志望していること（OR 2.6）だった。また、奨学金を返還する可能性について 54 名（15.6%）が「とてもある」と回答し、186 名（53.8%）が専門医取得について不安を感じていた。

### [研究 3]

最後に著者は、研究 2 の対象者の内、研究 1 でも回答していたものを対象として、2015 年にコホート調査を実施した。6 年生での定着意思を従属変数とし、説明変数は、研究 1 と同じ変数のほか、1 年時の定着意思を加えて、研究 1 と同様の解析を行った。

31 大学の 208 名から回答を得た（追跡率 51.4%）。6 年生で定着意思が高い学生は 40 名（19.2%）だった。多変量解析で定着意思が高いことと関連していたのは、町村部・へき地出身であること（OR 2.1）、将来の進路選択において収入面の魅力による影響が小さいこと（OR 0.3）、1 年生の時点での定着意思が高かったこと（OR 3.3）だった。

以上の結果から、著者は、地域枠学生の定着意思が、学年が上がるにつれて大きく低下することを明らかにしている。定着意思の高い学生を増やすためには、もともと定着意思の高い学生、町村部・へき地出身の学生、収入に拘らない学生などを選抜することが重要であると考えられた。また、将来のキャリアに就いて不安を感じている地域枠学生が多く、彼らへの支援や教育を充実させることにより、在学中に定着意思を低下させないことが必要であると考えられた。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

著者は、全国の地域枠学生を対象としたアンケート調査を実施し、卒業後に医師不足地域に定着する意志と関連する要因を明らかにした。この成果は、地域枠学生の選抜方法および入学後の教育・支援に対して重要な示唆を与えるものであり、全国で初めて実施された大規模調査として貴重なものである。

平成 29 年 1 月 12 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。